

交流を軸とした「多世代共創」の手法により  
山川草木人の国土を実現

# 多面的機能を支援された農業

20、21世紀は農薬や化学肥料に依存した農業がおこなわれた結果、生物多様性は損なわれ、化学物質の汚染と拡散が進んだ。これから百年かけて、農業は化学物質に依存しない農業へと変わり、さらに米だけではなく多様な食料と材料を産み出し、多くの生物が生息する場へと転換する。豊かな景観を支え、生物多様性を支え、洪水流出を抑制する農地は、多くの人と交流する仕組みをもち、環境支払いなどにより支援され、持続可能な農地へと発展する。



農地のイメージ。地下水涵養と生物多様性保全に寄与する冬水たんぼ。(熊本県益城町)



氾濫原的湿地、及び人と生き物のつながりの再生を行なう湿地のイメージ。  
(佐賀県唐津市・アザメの瀬)



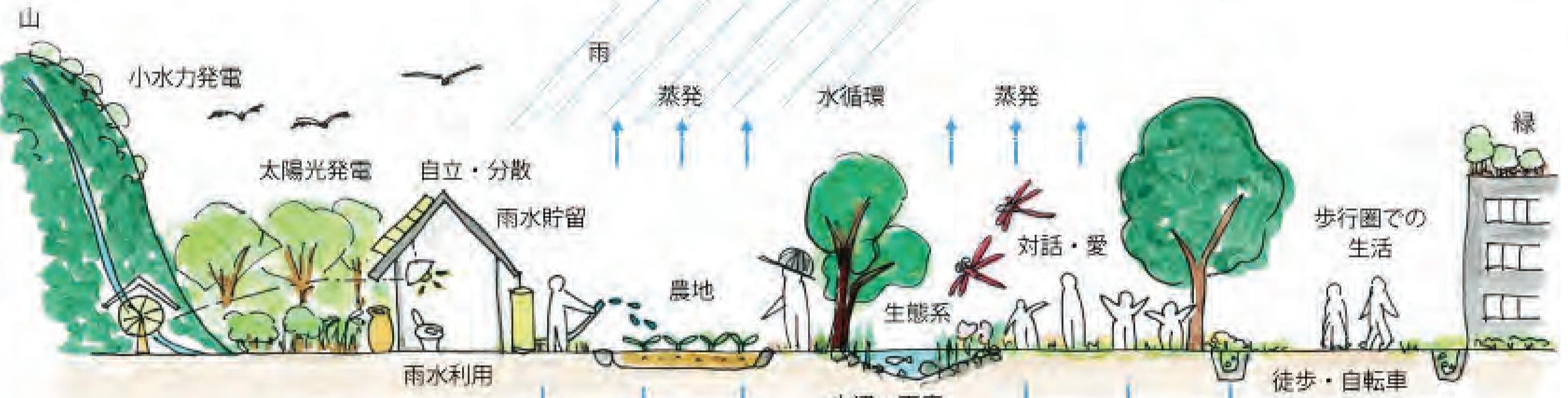
河川のダイナミズムにより再生された美しい自然風景と、人と自然の関係性の紡ぎあいの結果としてつくれられ変化を続ける風景。(同上)

# 移動と交流

物流や交通は人間の感覚を逸脱しない徒歩、自転車、スロービーグル、帆船などと物流や遠距離移動のための自動運転による高速移動網が連携して支える。まちは歩行圏に商店、人々が集う広場、水場、集会所を多数設けて拠点とし、人が対話できる機会を増やす。



地域の人々が集う集会所のイメージ。豪雨に対する分散型水管理インフラとしての雨庭を既存木造住宅に実装した例。国際的な来客も訪れ、様々な交流が育まれる。(福岡市・あめにわ憩いセンター)



多世代共創で行なう、「小さな実装」のイメージ。生徒たちが自ら学び考え、楽しみながら中庭雨庭に改造。(福岡市樋井川流域の中学校)



分散型水管理の概念が導入された建築物のイメージ。雨水・太陽光等を賢く日常的に活用し、災害時は緊急用水として使用可能となる。(左: 三國市、中央: 木戸、右: 三國郡新宮町、新宮北小学校) 

# 人と係りのある山林

九州の山の大部分は樹齢50年を超える針葉樹に覆われている。昨年の北部九州豪雨では斜面崩壊によりこれらの針葉樹が流木化し甚大な被害をもたらした。針葉樹林は材としての価値は持っているが、いわゆる山の幸は小さく、そのため人の係りは限りなく小さい。九州の山々は古代から焼き畑の歴史があり、針葉樹、広葉樹、草原が混じり、人と係わりを持つ多様な山であった。22世紀の山林は、かつての山の姿へと戻し、山林から得られる恵みを、植物生産量の範囲で木材、食料、燃料などとして積極的かつ多様な利用を促進し、都市域や他の地域とも活発に交流する。



平成29年7月九州北部豪雨による斜面崩壊。豪雨によって流木化した針葉樹。流木による甚大な被害が生じた。(福岡県朝倉市)



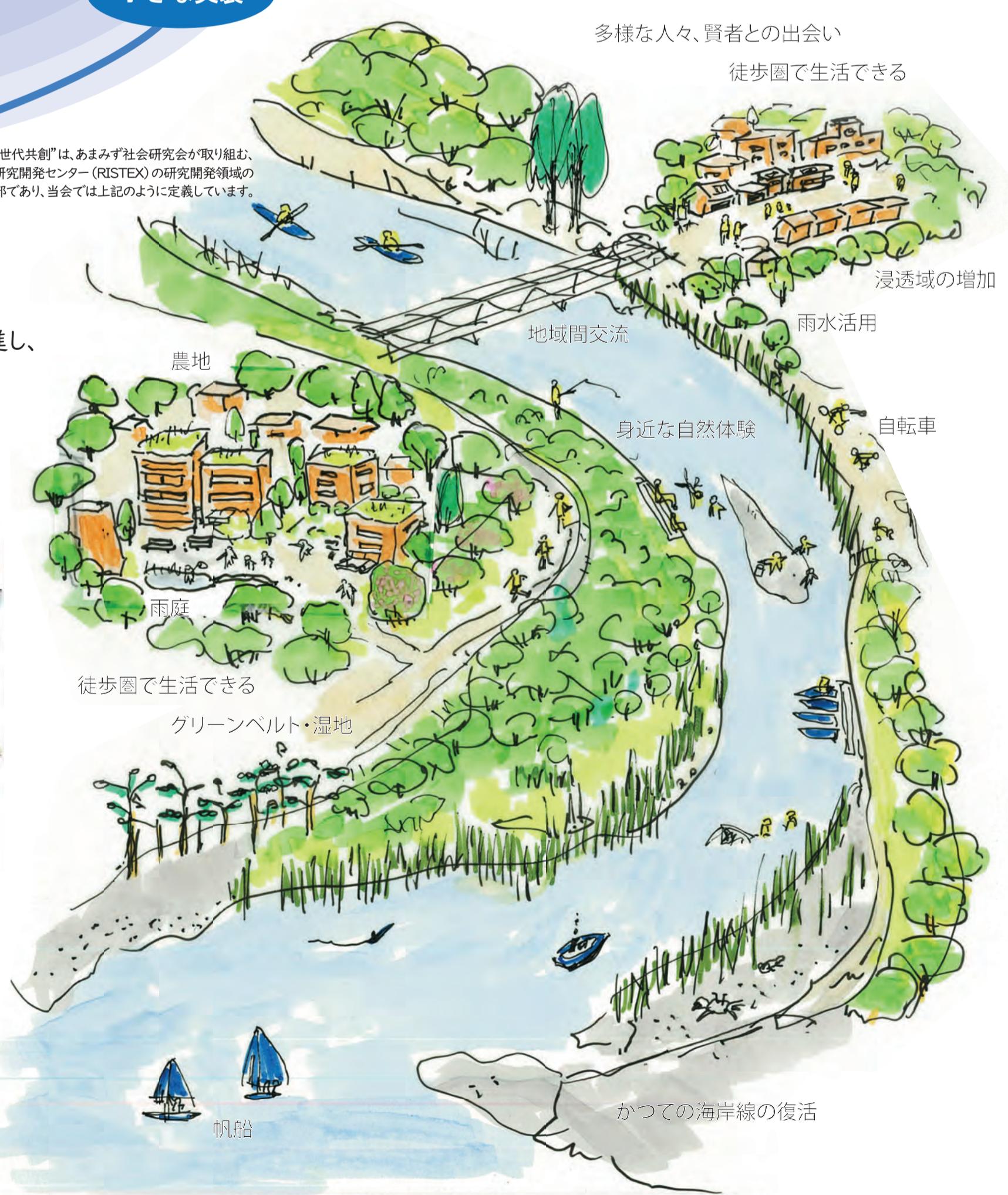
阿蘇の野焼きは、草地の維持であるのと同時に、地域の文化と風景を継承する活動である。

# 都市を自然に戻す：生物多様性の保全・ サնクチュアリの形成

都市内の海岸沿い、河川沿い、向背湿地、山地の縁辺部などの災害危険地帯はグリーンベルトや湿地として自然生態系が回復される。そこはサンクチュアリとして整備され人と自然が密接にかかわることができる。人口の減少に合わせて、都市内部にも適切に農地を配置し、小学校区を単位として徒歩圏に商業施設などが立地する。



川は河幅を広げ、自然生態系を回復させる。都市の身近な自然となるイメージ。(福岡県福津市・上西郷川)



先人が残した  
用し、今の人たち  
（福岡県東峰村）

